氏　　名　大倉得史（おおくら とくし）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第196号
学位授与の日付　平成15年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　「語り合い」のアイデンティティ心理学

論文調査委員　（主査）教授 鯨岡 峻　教授 岡田敬司　教授 新宮一成　教授 杉万俊夫

論文内容の要旨

本学位申請論文は，「語り合い」法という新たな方法を用いて現代を生きる青年たちのアイデンティティ問題を生き生きと描き出す一方，その葛藤する青年たちの本質を理論的に考察することを通してアイデンティティ概念の「意味」を再考し，アイデンティティ研究をさらに押し進めていくための新しい理論的枠組みを構築しようとするものであり，二部構成となっている。

第一部は二章からなる。まず第一章では，先行研究の批判的検討を通じて，これまでの質問紙法を中心にしたアイデンティティ研究はアイデンティティの「意味」を十分に問うものではなかったこと，また「アイデンティティ拡散」と呼ばれる青年の苦悩する姿がこれらの研究では必ずしも十分に浮き彫りにされてこなかったことを指摘する。そしてこの批判を踏まえて，申請者自身の「アイデンティティ拡散」体験を振り返り，また精神分析学，発達心理学等の諸学説を参照しながら，アイデンティティとは何かについて，申請者自身の立場を明らかにしようとする。そして，古典的アイデンティティ論はもはや成り立たなくなったといった一部の研究者の言説に対しては，アイデンティティを巡る問題は青年たちのあいだに今なお根強くあることを指摘するとともに，アイデンティティ拡散から達成へと至るプロセスの謎を解く鍵として，精神分析学のエディプス・コンプレックス理論を青年期に応用する可能性を探る一方，文化批判論的な現代青年論に対しても目配りしている。

続く第二章では，申請者が用いた「語り合い」法という新しい方法論を原論的に論じている。「語り合い」法とは，協力者と自由に「語り合う」ことを通じて，彼らがどのようにして青年期を過ごしているのか，その生の現実性（アクチュアリティ）に可能な限り迫ろうとする方法である。形式的には非構造化面接の一種であるが，申請者の「語り合い」法は協力者と観察者とのあいだの「間主観性」の分析を軸にするところに特徴がある。従来の心理学的面接法においては，データを客観的なものに限ることが研究の厳密性に繋がると目され，間主観的なものに言及することは忌避されてきた。しかしながら申請者は，人間存在の内面生活の理解は間主観的なものの分析を抜きにしては不可能であるということを論証する一方，間主観的なものを材料にしつつ，しかも「恣意的分析」に陥らないための方法論としてこの「語り合い」法を詳細に論じている。

具体的には，事象を了解する＜私＞と事象を生きる「私」とを峻別することによって，「私」の主観において捉えられた事柄の「意味」を＜私＞が科学的に論じることは可能であり正当でもあること，またその作業によってこそ，他者の内面生活の描写もなされ得ることを明らかにする。この第二章は，メルロ＝ポンティの言語論やナラティブ・セラピーの方法論，ラカン派の学説にヒントを得ながら，「語り合い」法についての基礎論を提示したものであるが，それにとどまらず，対人観察法一般についての原論的考察にもなっている。

第二部は四編からなり，第一部の理論的・方法論考察を踏まえた事例研究（三編）と総合考察からなる。申請者は五人の協力者と「語り合い」を行うなかで，彼らがアイデンティティを巡ってどのように格闘しているかを，申請者の体験も交え

ながら詳細に描き出すとともに，その語りの背景をなす間主観的交流を詳細に分析している。

まず第二部第一編では，いわゆるアイデンティティ拡散に陥った経験を持つ三人の協力者の事例を「語り合い」のエピソードの基づいて詳細に紹介し，アイデンティティ拡散とはどのような状態であるのか，彼らがそれをどのように生き，どのようにそこを抜け出していったのかを「語り合い」の間主観的交流の分析を通して明らかにしている。

その際，申請者はそこで生起している事象に密着する態度を堅持しながら，拡散状態に伴われる独特の苦しみの感覚を言い当てるための用語として＜居住自己＞，＜投げ出し―投げ出され体験＞，＜他の場＞等々の記述概念を編み出すとともに，とりわけ根深い拡散状態にあった須賀という協力者との「語り合い」から，拡散状態の本質的特徴が自からを映し出す鏡としての＜他の場＞のあくなき「否認」にあることを見出している。さらに，拡散の苦しみはこの＜他の場＞を「再認」する態度が強まってくるとともに減少してくること，またそのことが従来「アイデンティティ達成」と言われてきたことの内実であることを指摘すると同時に，「否認」の態度が乗り越えられ，「再認」の態度がようやく優勢になってきたにもかかわらず，留年を重ねることになった須賀のあり方を多面的に考察している。加えて，他の二人の協力者が拡散をどのように乗り越えたかをこの須賀の乗り越え方と対比させながら論じて，申請者が導いた拡散理論の一般化を目指している。

第二部第二編では，上述のアイデンティティ拡散に苦しんだ須賀と，アイデンティティ拡散には陥らなかった川田という協力者とを比較検討する中で，拡散に陥る青年と陥らない青年とのありようがそれぞれどのようなものであり，またその異質性が何に基づいているのかを考察している。その結果，前者は＜他の場＞を厳しく「問い続ける」態度を取っているのに対して，後者は基本的に＜他の場＞に「基づく」態度を取り続けているというように，両者のあいだには明確な相違があることを見出し，一度は拡散に陥らなければアイデンティティ達成には至らないとする従来の質問紙法を中心にしたアイデンティティ研究の枠組みそのものが再考の余地のあるものであることを明らかにしている。

さらに第二部第三編では，＜他の場＞を「否認」しているとも「再認」しているとも言えるような不思議なありようを示した緑川という女性協力者に焦点を当てている。すなわち，これまで申請者が作り上げてきた理論的枠組みによっては押さえ切れない事例を取り上げることによって，申請者は拡散／達成という従来のアプローチの枠組み上の問題点を再度指摘するとともに，拡散に陥るが陥らないがという単純な二分法を超えて，この時期の青年たちが直面する問題の多面性をより一般的に考察するための方途を探っている。

最後に第二部第四編の総合考察では，これまでの議論を総括するとともに，申請者独自の物語論的アプローチの構想，及び「語り合い」の妥当性を検証するための「メタ語り合い」の構想などを提示し，今後の研究を展望している。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文代「語り合い」法という新たな方法を用いて現代青年のアイデンティティを巡る葛藤を生き生きと描き出す一方，その葛藤する青年の本質を深く理論的に考察したユニークかつ意欲的な大作である。本論文は理論的・方法論的考察を展開した第一部と，「語り合い」の如実相を提示した第二部の，二部構成からなっている。

第一部の第一章では，先行諸研究に批判的検討を加え，既存の諸研究はエリクソンのアイデンティティの概念の意味を十分問うことなく「拡散から達成へ」というエリクソンの発達図式ばかりが強調されてきたこと，その一方で，「アイデンティティ拡散」に苦悩する青年たちの姿が必ずしも十分に浮き彫りにされてこなかったことを鋭く指摘する。この批判は，申請者自身の「拡散」体験とエリクソンの原典の読み直しに基づくものであると同時に，精神分析学，発達心理学等の学説を参照しつつ，アイデンティティの意味を語り合いの事象に即して煮詰めていった結果である。そこで展開される論考はきわめて精緻かつ独創的であり，従来のアイデンティティ研究に再考を迫るとともに，この研究領域に新たなパースペクテイブを切開く重要な価値をもっている。また，アイデンティティ拡散から達成へと至るプロセスの謎を解く鍵として，難解なラカン派のエデイプス・コンプレックス論を青年期に応用する可能性を探って見せた点も，青年期についての斬新な発達心理学的考察として特筆に価する。

「語り合い」法を原論的に論じた第一部第二章もまた，従来の面接法を越える方法論的吟味を成し遂げた点で高く評価できる。「語り合い」法とは，協力者と自由に「語り合う」ことを通じて，彼らがどのようにして青年期を過ごしつつあるか，その生の現実性（アクチュアリティ）を捉えようとするための方法であり，それ自体はきわめて素朴な非構造化面接の一変

種である。しかし申請者は，その素朴な方法論を原論的に吟味するなかで，協力者の内面生活の理解に間主観的なものの分析が欠かせないこと示す一方，その分析が「恣意的分析」に陥らないための方法論的手続きがどのようなものであるかを詳細に論じ，この素朴な方法論が青年期研究の方法として妥当なものであることの根拠付けに成功している。またこの原論的考察は，「語り合い」法のみならず，面接法や参与観察法一般にまで敷衍できる重要な内容を含んでおり，発達研究法に対する重要な貢献であると高く評価できる。

本研究の第二部は，第一部の理論的・方法論考察を踏まえた事例研究からなっている。申請者は五人の協力者と「語り合い」を行い，彼らがアイデンティティを巡ってどのように格闘しているかを，申請者自身の体験も交えながら生き生きと描き出すとともに，その語りの背景をなす間主観的交流を丁寧に分析してその語りの意味に肉薄し，アイデンティティ問題にこれまでとは違った角度から照明を当てることに成功している。

わけても第二部第一編は，いわゆる「アイデンティティ拡散」に陥った経験をもつ三人の協力者との「語り合い」を通して，アイデンティティ拡散とはどのような状態であるのか，彼らがそれをどのように生き，どのようにそこを抜け出して行ったのかを詳細に提示したものである。こうした試み自体，これまでのアデンティティ研究には見られなかったものであり，これからのアイデンティティ研究に新しいパースペクティブを切開いたことは疑いを入れない。加えて，申請者は拡散状態に伴われる苦しみの感覚を言い当てるために，＜居住自己＞，＜投げ出し―投げ出され体験＞，＜他の場＞といった独自の記述概念を導くとともに，拡散状態の本質的特徴が＜他の場＞の「否認」にあること，拡散の苦しみはこの＜他の場＞を「再認」する態度が強まってくるとともに減少してくることを明らかにして，青年期後期を生きる青年たちの苦しみの源泉を描き出すことに成功している。この第一編は，『拡散』という表題ですでに単著として公刊され，アイデンティティ研究の先達による書評においても高い評価を得ている。

さらに第二部第二編以降では，上述のアイデンティティ拡散に苦しんだ青年たちと，アイデンティティ拡散には陥らなかった青年，あるいは独特な潜り抜け方をした青年とを比較検討する中で，拡散に陥る青年と陥らない青年とのありようがそれぞれどのようなものであり，またその異質性が何に基づいているのかを考察し，その違いが，＜他の場＞を厳しく「問い続ける」態度と，＜他の場＞を温存しそれに「基づく」態度の相違にあることを明らかにした。これらの考察は，一度は拡散に陥らなければアイデンティティ達成には至らないとする従来のアイデンティティ研究の枠組みそのものに再考を迫るものであると同時に，この時期の青年たちが直面する問題の本質をより一般的に考察するための手がかりを提示したものになっている。

このように，本申請論文はこれまでのアイデンティティ研究には見られない独創的かつ精力的な論考であると高く評価できるとともに，現代社会の中で青年期後期を懸命に生きる青年たちの如実相に迫る点で，広義の環境の中で人間形成のありようを考究する人間・環境学専攻人間形成論講座の目的にかなった優れた論文である。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成15年２月５日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。